

## “老人観”に関する研究の問題

桑 原 洋 子, 水 戸 美 津 子, 飯 吉 令 枝

新潟県立看護短期大学

Japanese Attitudes toward the Eldely :

A Reviw of Research Findings.

Youko KUWABARA, Mitsuko MITO, Yoshie IIYOSHI

Niigata College of Nursing

**Summary** The old people increased, and mean life extended it. Therefore, thought toward the old people and the image must be reexamined. It has been coming that it cannot but think about the old people's location in society and the meaning of the old age. Review about thought toward the old people and the image in the general society and the nursing care basic education.

The following thing:

- ① The definition of “old man” isn't clear.
- ② The contents analysis of the interchange experience and the contact experience is necessary.
- ③ It must be examined about the validity of the method which evaluates the transfiguration of the thought toward the old people and the image.

**要 旨** 高齢者が増え、平均寿命が延びたという事実は、従来の「老人観」「老人のイメージ」の再考をせまると共に、高齢者の社会での位置づけ、人生における老年期の意味について考えざるを得なくなっている。

そこで、本論文においては一般社会及び看護基礎教育の場での「老人観」に関する研究を検討し、①“老人”の定義の不明確性、②老人との交流経験・接触経験の内容検討の必要性、③老人看護学における基礎研究としての「老人観変容の評価」の妥当性の検討の3つが今後の研究の重要課題であることを明らかにした。

**key word** : 高齢者 (the aged, eldely) ,  
イメージ (the image) ,  
老人観 (the attitudes toward eldely)

## I. 序論

我が国において、総人口に占める65歳以上人口の割合が7%を超えた1970年以降、注目すべき本がある。有吉佐和子『恍惚の人』<sup>1)</sup>、ポーボワール『老い』<sup>2)</sup>である。この2冊は1972年に共に日本で出版されている。『恍惚の人』は痴呆老人とはどのようなものかというある種のステレオタイプを示し、『老い』は“絶望、空虚、無為、貧困の老年期”を我々の前に提示した。この2冊の著書は、陰鬱で不安を増大させるライフステージとしての老年期をイメージさせた。

1995年10月現在（総務庁統計局）の我が国の65歳以上の人口は約1860万人であり、全人口に占める割合は14.8%となった。しかし、地域差は大きくすでに65歳以上の人口が全体の40%を越える地域がある一方で、未だ10%以下のところもあるのが現状である。21世紀には65歳以上の人口が日本全国平均で全体の1/4を占めるようになる。我が国の場合、この人口の高齢化のスピードが急激である。世界的にみると、社会が高齢化社会から高齢社会に移行する指標とされる老年人口の割合が7~14%に達するのに要した年数は、フランスに於いては130年、スウェーデンでは85年、イギリス・旧西ドイツでは45年であるのに対し、日本は24年という短期間であった。

高齢者が増え平均寿命が延びた結果、高齢者の社会での位置づけ、人生における老年期の意味について考えざるを得なくなっている。そして、高齢者・高齢化等に関わる問題が医療・福祉分野のみならず、教育・経済の分野等でも諸処論議されている。この様々な問題に対処していくためには、高齢者自身が老年期をどうとらえているのかということや、我々の社会全体が高齢者や老年期をどう評価し対応しているのかを把握することが重要である。

我々が本論文でとりあげた“老人観”“老人のイメージ”“老人像”に関する諸研究は、使用される言葉は異なるが、内容については「老人をどのように見ているか」を異なった角度から検討したものである。しかし、これらの多くの研究は“老人とは誰のことか（老人の定義等）”が不明確なままである。そのため、ライフステージで最も個人差が大きくなる老年期を個々の研究者が、すでにある一定のイメージで考察している感がある。

そこで本論文では“老人観”に関する研究を概観し、老人観の研究の意味と課題を明らかにした。

## II. 一般社会における「老人観」に関する研究

1985年に「間違いだらけの老人像」<sup>3)</sup>という本が出版されている。著者の柴田らは老人像は高齢化が急速にすすむ日本においてマスコミが老人問題や老化の問題を毎日のように取り上げ、老後の問題として国民の関心を引くものとなった、と述べている。特に健康、経済面での不安がある老人像が作り上げられている。平成7年度の世論調査<sup>4)</sup>がこれを裏づける結果となっている。東京都の20歳以上の3,000人に行った調査で、老後や老後の生活で考えることについて、70%の者が「からだのこと」、53.8%の者が「老後の貯えのこと」を挙げており、老後の健康や経済面に関心が寄せられていることがわかる。

このような状況の中、老人に対するイメージの主な先行研究は表1-1・1-2のようになっている。ここでは、これらの研究から調査対象により老人のイメージ等がどのようにとらえられているのかについて検討した。

### 1. 小学生を対象にした研究

小学生を対象とした研究には、湯沢<sup>5)</sup>、中野ら<sup>6)</sup>によるものがある。湯沢は小学生からみた祖父母との関係を調査し、同居している孫の方が祖父母に対して、より愛着を感じ別居している孫は関心が比較的弱く相互関係が進んでいるとはいえない、と報告している。

また、中野らは、小学生は高齢者の情緒面、人格面においては、かなり肯定的な認識やイメージを持っているが、身体面に対しては中立的な評価であった、と報告している。また、イメージに影響する要因として、これまでの老人との関わり方がどうであったかによるとして、関わった経験が多いほど、より肯定的なイメージをもつ、と述べている。さらに、「同居している祖父母との現在の交流」が全く影響力を示さなかった点は興味深いと述べ、今後の課題として、なぜ現在の関わりでなく過去の関わりが関係するのか、どのような内容の関わりがプラスイメージに影響するのか、さらに否定的な態度や見かたに変わるのは何歳からなのかを明らかにしたい、としている。

### 2. 中学生を対象にした研究

中学生を対象とした研究には、馬場ら<sup>7)</sup>、山本<sup>8)</sup>、湯沢<sup>9)</sup>によるものがある。馬場らは前述の小学生に行った調査票を一部改変し中学生に実施した。中学生も小学生同様に高齢者の情緒面、人格面においては肯定的な認識やイメージを持っている。しかし身体面につ

表1-1 一般社会における「老人観」に関する研究

| 年、著者                                  | 「テーマ」・研究の焦点・目的   | 研究対象<br>対象者数                           | 方法                          | 調査項目  | 調査<br>期間     | 研究結果  | 対象  |
|---------------------------------------|--|--|-----------------------------|---|--------------|---|-----|
| 1994.<br>湯沢雍彦                         | 「小学生からみた祖父母との関係」孫にあたる子供は、祖父母のことを祖父母と同様に期待し接近したいという対象と見ているか   | 小学生<br>(1校)<br>4～6年生<br>515名           | アンケート調査                     | 1. 同居・別居の比率<br>2. 同居・別居の祖父母・孫関係<br>1) 祖父母と一緒に過ごす時間 2) 同居していることの長所・短所  | 1985<br>6月   | 祖父よりも祖母に対して親近感をもっている<br>男子より女子の孫の方が祖父母に対して積極的に接触しようとしている。同居している孫の方が祖父母に対して強い愛着を感じ、別居している孫は関心が比較的弱く相互関係が進んでいるとはいえない状況にある。        | 小学生 |
| 1995.<br>中野いく子<br>中谷陽明<br>冷水豊<br>馬場純子 | 「小学生の老人観について」通説（児童の多くは比較的早い時期に高齢者に対する否定的な見方や態度を形成し、成長するにつれて、一層ステレオタイプ化された否定的イメージをもつようになる。しかも一途中略）が普遍的・通文化的に我が国の児童にも当てはまるか  | 東京都区部の2小学校、埼玉県郡部の1小学校<br>3～6年生<br>910名 | クラス単位の集合調査<br>SD法、老人観スケール使用 | 1. 基本属性（性、学年、地域、家族構成等）<br>2. 祖父母との同、別居状況<br>3. 高齢者との交流・経験（同居、別居祖父母との現在、過去の交流経験、小さい頃世話になったか）<br>4. 老人および老いに対する認識<br>5. 老人のイメージ | 1990<br>5・6月 | 老人に対するイメージでは、高齢者の情緒面、人格面を評価する次元においてかなり肯定的な認識やイメージを持っている。一方、身体面では中立に近い評価であった。また、イメージに影響を与える要因としては「老人との過去の経験」が最も重要で経験が多いほど肯定的である。 |     |
| 1993.<br>馬場純子<br>中野いく子<br>冷水豊<br>中谷陽明 | 「中学生の老人観」北米通説では12歳～13歳頃までに否定的な老人観が固まるとされていることから、中学生になると否定的な老人観に変わるかどうかを明らかにする。中学生の抱く老人観の構造。老人観に影響を与える要因。改訂した老人観スケールの検討。    | 東京区部の1中学校 埼玉県郡部の1中学校<br>(658、338) 996名 | クラス単位の集合調査<br>SD法、老人観スケール使用 | 1. 基本属性（性、学年、地域、家族構成等）<br>2. 祖父母との同、別居状況<br>3. 高齢者との交流・経験（同居、別居祖父母との現在、過去の交流経験、小さい頃世話になったか）<br>4. 老人および老いに対する認識<br>5. 老人のイメージ | 1992<br>7月   | 老人に対するイメージでは、高齢者の情緒面、人格面を評価する次元においてかなり肯定的な認識やイメージを持っている。しかし、身体面では、やや否定的であった。イメージに影響を与える要因としては交流の多いものがより肯定的な老人観を抱いている。通説はあてはまらない | 中学生 |
| 1995.<br>山本浩二<br>丹 公雄                 | 「中学生の意識調査を通して」教育を行うための基礎資料として中学生の高齢化社会に関する意識・知識に関して調査する  | 東京都内4中学校<br>1年157、2年301、3年703、1161名    | 質問紙調査法                      | 高齢化社会に対する知識に関する10項目<br>高齢者に対する意識に関する15項目  | 1994<br>7月   | 中学生の高齢化社会に関する関心は学年、性に関係なく、かなり低く基本的知識も備わっていない。高齢者に対する接し方や意識は低学年の方が、同居群の方が思いやり度が高い。介護が必要な高齢者に対する意識に同居群と別居群で大きな差がでた。               |     |
| 1994.<br>湯沢雍彦                         | 「中学生からみた祖父母との関係」小学生と同様の調査であり孫にあたる中学生は祖父母のことを祖父母と同様に期待し接近したいという対象とみているか   | 中学生2年260名                              | 一斉自己記入式                     | 1. 同居・別居の比率<br>2. 同居・別居の祖父母・孫関係<br>1) 祖父母と一緒に過ごす時間 2) 同居していることの長所・短所  | 1986<br>7月   | 同居している孫は祖父母との交流・接触の機会が多く、同居のプラス面と同時にマイナス面も敏感に感じ取っている。別居している孫は、長所のみを美化して考える傾向にある。  |     |
| 1994.<br>綿引伴子                         | 「女子高校生の高齢者に対する意識や関心の現状とそれに影響を与える要因」高校生の高齢者に対するイメージやいたわりの気持ち、関心を調査し、それらに影響を与える要因を分析することによって若者と高齢者がお互いを理解しながら共に生きていくための方向を探る | 神奈川県内2校 茨城県内3校の公立高校2年女子<br>1033名       | 質問紙法（無記名自記式）による集団調査         | 1. 高齢者のイメージ<br>2. 高齢者へのいたわり<br>3. 高齢者についての関心<br>4. 祖父母との同居経験<br>5. 高齢者との接触経験<br>6. 高齢者についての家庭や学校での学習経験                        | 1988<br>7月   | あまり良いイメージは持っていない。要因としては同居の経験は関連がみられず、むしろ同居経験を持った人がマイナスイメージより多く持つ傾向にある。また接触経験の多い人ほどよいイメージをもつ。学校での学習経験以外は学習経験とイメージとの間には関連はみられない。  | 高校生 |

表1-2 一般社会における「老人観」に関する研究

| 年、著者                   | 「テーマ」・研究の焦点・目的   | 研究対象<br>対象者数  | 方法          | 調査項目  | 調査<br>期間       | 研究結果  | 対象    |
|------------------------|--|---|-------------|---|----------------|---|-------|
| 1996.<br>湯沢雍彦          | 「高校生の老人イメージ」<br>小、中学生は老人のイメージが肯定的であるが、大学生では否定的である。この中間にある高校生はどうか   | 8の高校<br>1039名                                       | 自記式         | 1. 老人のイメージ<br>2. 老人との接触経験と希望<br>3. 祖父母との同、別居状況  | 1995<br>6～7月   | 加齢による体質の若干の偏りと表面に見える態度の衰えは認めながらも、大勢としては老人世代を「温かい目で肯定的に見ている」と言える。  | 高校生   |
| 1988.<br>保坂久美子<br>袖井孝子 | 「大学生の老人イメージ」<br>大学生の老人に対し、抱いているイメージを明かにし、またそれらのイメージがいかなる要因によって規定されているのかを明らかにすること                                   | 東京都内およびその近郊にある7大学567名                               | 自計式<br>質問紙法 | 1. 対象者の基本的属性<br>2. 老人のイメージ<br>3. 老人・老人問題への接触と認知<br>4. 祖父母との同居経験や接触頻度<br>5. 親孝行意識<br>6. 老親に対する扶養、介護意識        | 1986<br>6～7月   | 大学生が抱く老人のイメージは、どちらかというと否定的である。因子分析の結果、有能性、活動・自立性、幸福性、協調性、温和性、社会性外向性の6因子から成る。イメージを規定する要因は、老人への関心や祖父母との接触など個人の経験に基づく要因の方が重要である。 | 大学生   |
| 1991.<br>今村義正          | 「大学生の高齢者に対する世代観」<br>高齢者の健康観や価値観に対して大学生がどのように感じ考えているか   | 1大学1年生<br>432名                                      | 授業中にアンケート調査 | 1. 高齢者に対する若者の関心、好意<br>2. 高齢者に対する親切観・協力観<br>3. 高齢者の欲求・価値観・健康・生活について<br>4. 自分のイメージした高齢者について                   | 1989<br>6月     | 高齢者に対して無関心派が半数おり、好意を持っていないものも多い。健康状態については30%のものが良くないと見ている。生活に関しては、寂しそうで楽しそうでないと見られる高齢者も少なくない。イメージした高齢者は、半数が70歳代であり、家族であった。    |       |
| 1991.<br>山本慶裕          | 「高齢者に対する偏見の考察」<br>青年は、どのような人々を老人と考え老人に対してどのようなステレオタイプを抱いているのかという点についてあきらかにする。                                      | 1大学、工学部の学生400人<br>男性が大半をしめる                         | アンケート調査     | 1. 老人とみなす年齢・退職すべき年齢<br>2. 老人の長所、短所<br>3. 老人に対する認識に関すること   | 不明             | どのようなステレオタイプを持っているか調査すると老人期に人間としての「知恵」を身につけた存在であるが、肉体的力が衰えると同時に精神的能力も衰え、労働効率が低下し職場や日常生活での問題を多く起こす存在であった。一方個人差があり未来の可能性も信じている  |       |
| 1994.<br>今井芳明          | 「高齢者に対する学生の意識—学生からみた高齢者の健康観・価値観について—」<br>高齢者に対する大学生の世代観を明らかにする   | 1大学<br>180名   | 集団式、質問紙調査   | イメージをSD法<br>態度測定  | 不明             | 高齢者世代の方が自世代よりも社会的に望ましい属性を備え活動的で社会に対する貢献度が高いと認知している。しかし、自世代に比べ明るくなく親しみが持てないという結果であった。  |       |
| 1976.<br>古川正之<br>秋山登代子 | 「日本人の世代観—国民世論調査「世代観」の結果から—」<br>世代の断絶の背後にある世代間のコミュニケーションの程度、相互にもつ世代イメージ、世代差をどの程度認識し評価しているかという問題から人々の世代に対する意識、世代観を探る | 15歳以上の男女3600人<br>(有効解答数2071人)<br>男性1197人<br>女性1504人 | 個人面接法       | 1. 世代間のコミュニケーションと世代差の感覚<br>2. 世代差を感じる場<br>3. 各世代に対するイメージ<br>4. 世代差をどの程度認識し、評価しているか<br>5. 世代差のイメージと実態は外れているか | 1976<br>2月6～8日 | 老年＝65歳以上のお年寄りに対してのイメージに関して若年・中年の人々はプラスイメージを持つものが2割強、マイナスイメージを持つものが3割いる。マイナスイメージはコミュニケーションが少ない人に多い。また、老年者自身とのイメージともずれがある。      | 主に中高年 |

いてはやや否定的である、と述べている。イメージに影響する要因としては高齢者との交流や経験が強く影響しており、特に幼児期や小学校時代に高齢者とのような関わったかが重要である、としている。これは性別や年齢に関係がなく、また祖父母との同居または別居の影響に関しては一貫した傾向が認められない、としている。

一方、山本は高齢者への接し方や意識は低学年の方が、また同居群のほうが思いやりが高いと述べ、湯沢は同居している方が高齢者のプラス面・マイナス面の両方を感じ取っており、別居群は長所のみを美化している、と述べている。

### 3. 高校生を対象にした研究

高校生に対する研究は綿引<sup>10)</sup>、湯沢<sup>11)</sup>によるものがある。綿引は、女子高校生の高齢者に対する意識や関心について検討し、祖父母との同居経験、高齢者との接触経験（高齢者のために何かしてあげたこと・高齢者と一緒に何かしたこと・高齢者から直接教えてもらったこと等）、高齢者についての学習経験と高齢者に対するイメージ、高齢者への関心やいたわる気持ちの関係について報告している。その結果、女子高校生は老人に対して全体としては、あまりよいイメージをもっていない、同居経験のある方がマイナスイメージを多く持つ傾向にある、と述べている。また接触経験の多い人、学校での学習経験がある人の方が良いイメージを持つ、としている。

一方、湯沢は高校生は老人に対して加齢による体質の偏りと表面に見える態度の衰えを認めながらも温かい目で肯定的に見ている、と報告している。

### 4. 大学生を対象にした研究

大学生に対する研究は保坂ら<sup>12)</sup>、今村<sup>13)</sup>、山本<sup>14)</sup>、今井<sup>15)</sup>によるものがある。保坂らは、7大学の大学生に調査し、大学生が老人に抱くイメージはどちらかといえば否定的であり、イメージを規定する要因としては老人への関心や祖父母との接触などの経験に基づく要因が重要である、と述べている。

今村はある特定の大学の学生を対象に調査し、学生の中には高齢者に対して無関心派が半数おり好意を持っていない者も多いこと、健康状態については30%の者がよくないとみていること、生活に関しても寂しそうで楽しそうでない高齢者も多いとみている、と報告している。

同様に、今井もある一つの大学の学生を対象に調査を行っている。その結果、学生は自分たち大学生の世代よりも高齢者の世代の方がポジティブで社会的に望ましい属性を備え、活動的で社会に対する貢献度も高いと認知しているが、自分達の世代と比べると明るくなく親しみが持てない世代と認知している、と報告している。

また、山本は青年がもつステレオタイプについて調査し、青年は老人を既に人間としての「知恵」を身につけた存在であるが、肉体的な力が衰えると同時に精神的能力も衰え労働効率が低下し、職場や日常生活での問題を多く起こす存在である。しかし、一方個人差が大きく、未来の可能性もあるととらえている、と述べている。

### 5. 主に中高年を対象にした研究

主に中高年を対象とした研究には古川ら<sup>16)</sup>によるものがある。中高年を対象にした高齢者に関する調査はこの他に、国民世論調査の項目にもみることができ<sup>17) 18)</sup>。

古川らは、各世代に対するイメージをまとめ、高齢者に対しては、信念をもち、思いやりがあり、人とのつながりがある世代とみている人が多い反面、孤独な存在とみている人も多い、と報告している。そして、若者、中年の人達は高齢者に対してプラスイメージを持つものが2割弱、マイナスのイメージを持つものが3割おり、マイナスのイメージを持つ人は高齢者とのコミュニケーションが少ない人に多いと述べ、更に若者、中年の持つイメージと老人自身が持つイメージにズレがある、と報告している。

### 6. 小括

高齢者のイメージは児童から中学生、高校、大学と年齢が上がるにしたがって、肯定的なみかたからプラス面もマイナス面もみれるようになり、自分が高齢者に近くなるほどマイナスのイメージや高齢者の生活に不安を持つようになる傾向がある。この高齢者のイメージに影響する要因として各研究者は、高齢者との同居または別居の状況や高齢者との交流経験・接触経験の有無が影響要因として重要と考えている。しかし同居または別居については、研究者により結果が異なり、これらの文献を通してみれば同居または別居の状況が高齢者のイメージに影響するとは言えない。

また、高齢者との交流経験・接触経験の有無につい

て、中野ら<sup>6)</sup>は現在より過去にどのような交流を経験しているかということに注目しており、綿引<sup>10)</sup>は接触経験の多い方がよいイメージを持っている、と報告している。「高齢者との過去の経験や交流、接触経験の有無」というテーマで調査されているが、その具体的な内容についての分析は行われていず、どのような接触経験や交流がイメージにどのように影響しているかという点は今後の課題であろう。

### Ⅲ. 看護基礎教育における「老人観」に関する研究

看護学生の老人観に関する研究は、1984年に山田ら<sup>19)</sup>の「看護学生がとらえた老人像」で初めて報告された。(表2-1. 2-2) このほか、学会発表をみると1986年に藤澤ら<sup>20)</sup>により老人看護の講義受講後の変化を調査したものや川島ら<sup>21)</sup>による老人看護学実習前後における老人イメージの変化を調査したものがある。1990年以降では、看護教育学会を中心に15例の発表がされている。

これら老人観に関する研究は、1. 講義や演習、実習などが老人観の育成にどのような影響をもたらしているのかを検討したもの、2. 教育方法の検討のために教育対象としての学生がどんなイメージを持っているのかを把握する目的で調査したもの、3. 老人観の評価表一尺度の検討、すなわち1.2.の測定の客観化を図るという方法論の検討としてでているもの、と3つの視点に大きく分けることができる。この3つの視点で分けた文献の数や研究された年は表3の通りである。

#### 1. 講義や演習、実習などが老人観の育成にどのような影響をもたらしているのかを検討したもの

1985年から1987年に鳴海ら<sup>22)</sup> 23)は講義受講後、及び臨床実習終了後の学生の老人観の変化について分析を行った。その中で、学生は講義を受けることによって、「負担」の感情を持ちながらも世話をする必要性を客観的に理解するなど、否定的な感情を有しながらも看護の必要性を感じ始めている、と述べている。さらに臨床実習終了後、学生は実習を通して直接老人と接し、具体的なふれあいの中から老人の孤独感や悲哀感を感じ取り、学生の老人に対する一般的なイメージは「悲嘆」が増加する、と述べている。

また、張替ら<sup>24)</sup>は、老人に対するイメージは第1学年より第2学年の方がプラス思考で、実習終了後の第3学年にはマイナス思考に変化するとしている。このことは、近藤ら<sup>25)</sup>、吉尾ら<sup>26)</sup>も同様の結果を示し、近藤らはこのことについて、実習がこれまでの観念的な見方から現実的な見方になったためと考察し、さらに実習後は、具体的な、あるいは多面的な見方ができるようになった、と述べている。

実習前後でのイメージの変化の要因を検討し、指導方法の解明を目的にしたものに、松岡ら<sup>27)</sup>や寺島ら<sup>28)</sup>の研究がある。松岡らは、実習終了後老人に対してマイナスイメージを持つ要因について、老人とのコミュニケーション、老人の態度・行動を受け取った学生の価値観、直接的な接触、実習施設の特徴及び条件を挙げている。また、寺島らは、同居経験の有無による実習前後の老人観の変化の違いについて、実習前から肯定的なイメージを持っていた健康な老人と同居している学生は、実習後「活動性」において否定的なイメージが増え、健康を害した老人と同居している学生は、実習後老人の「能力、価値」を肯定視するイメージが増えた、と述べている。そして、同居経験のない学生も、実習後イメージは肯定的に変化し、「老人との関わり方」についての学びが多い、としている。

表3 老人観や老人のイメージをキーワードにした文献(医学中央雑誌より)

|   | 1984 | 1985 | 1986 | 1987 | 1988 | 1989 | 1990 | 1991 | 1992 | 1993 | 1994 | 1995 |
|---|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 1 |      | 1    |      | 1    |      | 2    | 2    | 1    | 3    | 2    | 3    | 1    |
| 2 | 1    |      |      | 2    | 1    |      | 2    | 2    | 2    |      |      | 1    |
| 3 |      |      |      |      |      |      |      |      |      | 1    |      |      |
| 計 | 1    | 1    |      | 3    | 1    | 2    | 4    | 3    | 5    | 3    | 3    | 2    |

注) 1 講義や演習、実習などが老人観の育成にどのような影響をもたらしているのかを検討したもの

2 教育方法の検討のために教育対象としての学生がどんなイメージを持っているのかを把握する目的で調査したもの

3 老人観の評価表一尺度の検討、1及び2の測定の客観化を図るという方法論の検討としてでているもの

表 2-1 看護基礎教育における「老人観」に関する研究

|               | 年、著者                            | 研究のテーマ及び<br>研究の焦点・目的   | 研究対象者<br>対象者数               | 方法                 | 調査項目  | 調査期間                             | 調査結果   |
|---------------|---------------------------------|--|-----------------------------|--------------------|---|----------------------------------|--|
| 1<br>につ<br>いて | 1985<br>鳴海喜代子<br>野口美和子<br>土屋陽子他 | 「看護学生の老人観に関する研究 第2報」<br>看護学生の入学から卒業までの老人観の経時的変化について実態調査を行い、学生の老人観の発達に及ぼす様々な要因について分析を行う<br>講義受講後の分析   | 看護学校6校の1983、1894年度入学の学生376名 | 自由記述式のアンケート調査      | 老人観（SCT文章完成法検査）   | 1983.12～1984.4<br>1994.12～1985.4 | 学生の老人観の変化は、一般的な老人像では中立的反応が多く、学生の客観性の増加を示していた。自己の老人観では、漫然とした願望が減り、具体的な内容で表現されていた。全般的に見ると講義後客観的、並列的な表現が集約される傾向を示した。                        |
|               | 1987<br>鳴海喜代子<br>野口美和子<br>土屋陽子他 | 「看護学生の老人観に関する研究 第3報」<br>看護学生の入学から卒業までの老人観の経時的変化について実態調査を行い、学生の老人観の発達に及ぼす様々な要因について分析を行う<br>臨床実習終了後の分析 | 看護学校6校に在学中の学生318名           | 自由記述式のアンケート調査      | 経験した実習領域、受持老人患者の健康状態、行ったこと、実習の印象、老人との関わりの経験内容、老人観（SCT文章完成法検査） | 1986.1～3<br>1987.1～3             | 一般的な老人像では「退行」が減少し、「悲嘆」が増えていた。世話する立場から見た老人像では、肯定的な反応の中で「行動」が増加し、看護への動機付けが増していた。全般的には学生の老人観に大きな変化は見られなかったが、同一カテゴリーの中で感情を伴った現実性のあるものに变化していた |
|               | 1989<br>張替直美<br>大森武子他           | 「看護学生の老人観に関する研究」<br>老人看護教育内容の検討  | 1～3年の看護短大生156名              | アンケート調査            | 同居の有無、老人一般に対するイメージ（著者らが選んだ18項目）、老人知識スコア（25項目）、                | 1986.10<br>1987.3<br>1986.11     | 同居の有無とイメージ、知識の間に有意差はなかった。老人一般に対するイメージは、1学年より2学年の方が positiveで、3学年になると negative に変化した。   |
|               | 1992<br>近藤益子<br>太田にわ他           | 「看護学生の老人施設実習前後における老人観及び老人のイメージ」<br>学生が実習期間にどのような老人観やイメージを持つことができるかということは、人間理解の場として重要である。             | 3年生76名                      | 自記式アンケート法          | 老人のイメージ（守谷らの使用した38項目）   | 1989                             | 老人のイメージは実習後変化するが、内容的には概念的、外見적인見方から具体的、内面的な見方になった実習後にイメージは総じて否定的な方向に変化した。   |
|               | 1992<br>松岡広子<br>伊藤孝治            | 「老人看護学実習後における看護学生の老人に対するイメージ」<br>老人看護学の実習において、学生が老人に対しマイナスイメージを持った要因を明らかにする。                         | 1991年度2年生42名                | 自由記載               | 老人看護学実習終了後の「老人とのかかわりを通して」のレポート                                | 1992.5                           | 学生は実習で老人と接触することによって、老人に関してある一部的にマイナスイメージを抱いた。そのマイナスイメージとなった要因は、①老人とのコミュニケーションや老人の態度、行動を受け取った学生の価値観、②老人との直接的な接触、③実習施設の特徴及び条件である。          |
|               | 1993<br>寺島喜代子<br>高島真理子<br>遠矢福子  | 「老人ホーム実習における学生の老人観の変化」<br>老人ホーム実習が学生にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることで、今後の看護実習に行かしていく上での礎石にしたい。             | H3年度及びH4年度2年生100名           | 実習前後に、質問紙による自由記述方式 | 老人に対するイメージ<br>実習を通して学んだこと                                     | 1991.1992の4日間の老人ホーム実習前後          | 老人との同居経験の有無という生活背景の違いによって、実習における学び方も異なる。実習において、一概に負の老人観が形成されるという結果は得られず、むしろ障害を持ちながらも精神的に自立している老人の生き方に注目し、これまでの自身の偏見に気づいていた。              |

表2-2 看護基礎教育における「老人観」に関する研究

|           | 年・著者                                  | 研究の焦点・目的   | 研究対象者<br>対象者数                               | 方法   | 調査項目  | 調査期間                                     | 研究結果   |
|-----------|---------------------------------------|--|---|--|---|--|--|
| 2<br>について | 1984<br>山田ヒロ子<br>飯田澄美子                | 「看護学生がとらえた老人像」<br>学生が、老人期の授業をどの<br>ように受けとめ、実際場面で<br>どのように処理し、またどの<br>ような欲求を持っているかを<br>把握し、老人看護の独自性を<br>浮き彫りにし、今後のカリキ<br>ュラム検討の1資料とする | 看護学生<br>138人<br>3年課程<br>98人<br>2年課程<br>40人  | 質問紙<br>法<br>回答に<br>矛盾の<br>会った<br>人に面<br>接                    | 老人との同居<br>の有無と同居<br>期間<br>家庭に老人の<br>必要の有無<br>老人患者に接<br>した状況、接<br>して困ったこと<br>老人の考えて<br>いること<br>老人看護につ<br>いての考え | 1983.7.<br>1～<br>11.30                   | 同居の経験の有無にかかわらず、学<br>生は授業と違い、老人看護の難しさ<br>を指摘している。老人と接して一番<br>困ったことはコミュニケーションに<br>ついてであった。老人と同居し、関<br>係のよかった学生は老人患者に対<br>してよい印象を持ち、関係の悪かった<br>学生はよくない印象を持つ傾向があ<br>った。  |
|           | 1987<br>守屋滝乃<br>稲垣宣子<br>鈴木偉代<br>夏目みつ子 | 「老人」に対する意識調査<br>「老人」を知る第一歩として、<br>各世代における老人観が重要<br>ではないかと考え、調査を実<br>施  | 看護学生<br>看護学生<br>を持つ親<br>の世帯<br>老年層<br>各100名 | 質問紙<br>調査<br>老人の<br>イメー<br>ジプロ<br>フィール<br>(38<br>項目7<br>評価点) | 高齢者に対す<br>る意識調査<br>各世代の同<br>居、交流につ<br>いて<br>老人のイメー<br>ジ   | 1985.9.<br>20～<br>10.3                   | 学生は、壮年層に比べ老人と会話を<br>含め交流が少ない。老人のイメージ<br>はどちらかというと悪い、好意的で<br>ないイメージに注目した評定がなさ<br>れる傾向にあった。イメージが好意<br>的でない理由は、老化にはまだ間が<br>あるため率直かつ客観的に見ている<br>と言える。  |
|           | 1988<br>斎鹿ミヤコ<br>山本<br>村中 他           | 「看護学生の入院時までの生<br>活経験と老人観の関係」<br>老人理解という観点から看護<br>基礎教育の内容や方法のあり<br>方について検討が必要であ<br>る。老人看護の教育内容とそ<br>の方法を選ぶための基礎資料<br>を得ることを目的とする      | 入学した<br>看護学生<br>3年課程<br>107名<br>2年課程<br>37名 | 質問紙  | 老人と考える<br>年齢、連想語、<br>老人に対する<br>感情（SCT<br>文章完成テス<br>ト）、老人と<br>の生活体験  | 1988.4.<br>12～<br>4.15                   | 老人を表面的にとらえる傾向にあり、<br>連想語の中には社会での役割を果た<br>しているような老人をイメージした<br>表現はみられなかった。老人観には<br>これまでの生活経験が影響する。   |
|           | 1991<br>太湯好子<br>酒井恒美<br>杉田明子<br>初鹿真由美 | 「看護科学生が抱く老人のイ<br>メージ」<br>老人に対する批判的イメージ<br>を把握し、またそれらのイメ<br>ージに関与する要因を明らか<br>にする  | K短大看<br>護科の1<br>～3年の<br>全員168<br>名          | アンケ<br>ート調<br>査  | 市民意識実態<br>調査において<br>取り上げられ<br>た10項目のイ<br>メージ<br>否定的イメー<br>ジ20項目   | 1次調<br>査<br>1988.7<br>2次調<br>査<br>1988.9 | 因子分析の結果からは、嫌悪感、性<br>格や精神状態に関する否定的イメー<br>ジ、行動に関する否定的イメージの<br>3因子が抽出された。この3因子に<br>関与する要因を分析した結果、過去<br>における老人とのふれあいの体験も<br>影響があるが、現在の老人とのふれ<br>あいのいかなのほうの影響が大き<br>いことが明らかになった。このこと<br>から、老人看護学の教育の中で組み<br>込む体験の質の重大さが示唆された。 |
|           | 1995<br>小山真理子<br>牛山真佐子<br>田村正枝他       | 「看護大学学生の老人及び老<br>人ケアに対する態度」<br>老人に対する態度、ケアに対<br>する態度、及びそれらに影響<br>する要因を明らかにし、老人<br>看護教育プログラムの作成に<br>役立てる。                             | 看護大学<br>1～4年生                               | 質問紙<br>法   | 老人との生活<br>経験、世話の<br>経験、老化に<br>対する態度、<br>老人ケアに対<br>する態度、   | 1993.1.<br>15～<br>1.25                   | 老人に対して肯定的態度と否定的態<br>度を混在させている。老人に対する<br>態度は、老人との生活経験の有無に<br>よる差は見られなかったが、身内の<br>世話の経験のあるものは有意に肯定<br>的であった。教育プログラムの作成<br>に当たっては、学生自身が老人に抱<br>いている態度を明らかにすることか<br>ら始まり、自分なりの老人観を作り<br>上げていくことの必要性が示唆され<br>た。               |
| 3<br>について | 1993<br>近藤益子<br>太田にわ他                 | 「看護学生の老人イメージ調<br>査のための尺度項目の構成」<br>先に使用した老人のイメージ<br>尺度を因子分析によって再分<br>析し、これをもとに新しい尺<br>度項目を構成する  | 1989年に<br>3年生の<br>学生76名                     | イメー<br>ジ調査   | 老人のイメー<br>ジ38項目   | 1989                                     | 20項目を選んで看護学生の老人イメ<br>ージ調査のための尺度を構成した。<br>その有効性については実際の使用と<br>再度の分析を通じて検討したい。   |



## 2. 教育方法の検討のために教育対象としての学生がどんなイメージを持っているのかを把握する目的で調査したもの

山田ら<sup>19)</sup>、守屋ら<sup>29)</sup>、斎鹿ら<sup>30)</sup>、小泉ら<sup>31)</sup>は、老人看護教育検討の基礎資料として、教育対象としての学生が老年期、及び老人看護についてどのようなイメージを持っているかについて調査している。その中で山田らは、同居の経験の有無にかかわらず、学生は老人とのコミュニケーションに難しさを感じていた、と述べている。さらに、「同居経験」のみでなく「同居時の老人との関係」をみると、関係のよかった学生は老人により印象を持ち、関係の悪かった学生はよくない印象を持つ傾向があった、としている。また、斎鹿らも学生の老人観には、これまでの老人との生活経験が影響する、と述べている。

その後、太湯ら<sup>32)</sup>は、先行研究で検討された老人のイメージから批判的なイメージを取り上げ、それらのイメージに関与する要因を明らかにするために研究を行っている。そして過去における老人とのふれあい体験も影響があるが、現在の老人とのふれあいの状況の方がより影響は大きい、と述べている。

最近の研究では、小山ら<sup>33)</sup>が、老人や老人ケアに対する態度、及びそれらに影響する要因を明らかにし、老人看護学の体系化を図ることを目的に研究を行っている。その中で、老人に対する態度は、老人との生活経験の有無ではなく、身内の世話の経験のあるものが有意に肯定的であり、老人と接する機会とその接し方、話す機会が肯定的イメージの形成に関係する、と述べている。そして、さらにこのことは、カリキュラムの中に老人との出会いやふれあい、援助するという体験学習を効果的に導入することの意味を裏付けているものである、としている。

## 3. 老人観の評価表一尺度の検討、1. 2. の測定の客観化を図るという方法論の検討としてでているもの

1993年に近藤ら<sup>34)</sup>が、SD法の偏り、項目数についての問題点を上げ、尺度項目について検討を行っているが、その有効性については、実際の使用と再度の分析が必要であると述べている。

## 4. 小括

実習後の学生の老人に対するイメージは、マイナス思考に変化しているものも多く、このことに対

し近藤<sup>25)</sup>らは、老人の見方がより具体的、多面的になったため、と述べている。このような実習が老人観の育成にどのような影響をもたらすかを検討するうえでは、単にマイナス思考とすることを問題とするのではなく、実習を通して老人を見る目がどのくらい多様になったか、ということの方が重要である。鳴海<sup>22)</sup>らも、安易に学生の老人のイメージがプラスのイメージへと変化することのみに注目して、そのための教育方法の検討をしたり、それによってのみ教育的な効果を判断することは危険である、と述べている。

また、老人のイメージを規定している要因としては、「老人と話す機会」の与える影響が大きく、「同居経験」のみでは重要な規定要因とはならない、と指摘されている。吉尾<sup>26)</sup>らも述べているように、学生が実習を通してより多くの老人と接し、幅広い老人のイメージを持つことができるように、実習内容、方法、実習場についての検討も必要と思われる。

看護学生に対してのイメージ調査は、全体的にSD法や文章完成法等を用いてアンケート調査しているものが多い。これらの方法については、イメージの範囲が限られ、偏ったものになることが指摘されている。このことから、最近の研究では、菱沼ら<sup>35)</sup>が、自由記載によるイメージ調査を行っているが、イメージの深い意味は追求できないと述べている。イメージ調査の方法については、さらなる検討も必要であろう。

## IV. 「老人観」研究の問題

### 1. “老人”の定義の不明確さ

我が国では老年期にある人々を一般には、“老人”“高齢者”“年寄り”“隠居”等々と呼称している。年金や各種の福祉サービスなどを受けるために、55歳、60歳、65歳、70歳などという年齢で区分されることもある。1983年から施行されている老人保健法の保健事業の対象は原則40歳以上である。しかし、一般には40歳代の人々を我々は“老人”とは呼ばない。WHOによる老年者の年齢区分では45～59歳 middle-aged person (中年)、60～74歳 the elderly (年長者)、75歳以上the aged (老年者)と表現され一応60歳以上が定義されている。また、日本の定年年齢は徐々にではあるが60歳以降になりつつある。これらは、いずれも社会が「老人」として規定しているものである。

では、我々自身の内なる規定ともいえるべき「老人」に対する認識はどうなっているのだろうか。前章で小学生、中学生、高校生、大学生、中高年に行った調査

を検討した。そこで明らかになったことは、老人観とといったような価値観に関する事柄は個人差が大きいということであった。これらの調査では、調査対象者が何歳くらいの人を「老人」として考え、回答しているのかを調査項目に挙げているものもあるが、多くは単に「老人」として括って回答を求めている。調査に回答するときには回答者個々がイメージする「老人」は身近な祖父母が多いという結果も報告されている。このことを考えると、小学生にとっての祖父母は60歳代前半などの比較的年齢の若い者が中心であり、大学生になると70歳から80歳という後期高齢者といわれる、有病率が高く痴呆症などの出現頻度も高い人々の群をイメージしているらしいことが推察される。同じ「老人観」に関する調査でも調査されている人々の認識している「老人」は異なっている可能性が高い。老年期を仮に60歳からとすると、平均寿命約80歳までは20年もの期間があることを忘れてはならないだろう。

調査回答者のイメージする「老人」がそれぞれ違うのだから、それぞれの回答者が何歳くらいの人をイメージして回答しているのかは各調査項目にいれるべきであろう。

ただし、我々は「「老人」とは何歳からの人をいうのか」を定義したほうがよいと述べているのではない。「老人とはこのようなイメージである」ということではなく、「老人と言われたとき人は何をイメージするのか」が問われなければならないと考える。

## 2. 老人との交流経験・接触経験の内容検討の必要性

前章の文献の検討からそれぞれの「老人観」に影響を与える要因としては、同居または別居の有無よりは老人との交流経験・接触経験の有無が重要であることが示唆された。しかし、児童・生徒・学生の発達段階のどの時期のどのような交流や接触が重要であるのかといった内容にまで踏み込んだものとはなっていない。ただ単に、接触・交流経験をもたせればよいというものではない。

さらに、「経験する」ということをどのようにとらえるのか。経験したことが、どのように「老人観」に反映されていくのかが明らかにされているとはいえない。

## 3. 老人看護学における基礎研究としての「老人観変容の評価」の妥当性の検討

1980年代になると「社会的入院」が一般社会の問題

ともなり、臨床の場に高齢者が増加してきた。そのため、高齢者に関するケアについて検討されるようになった。1990年の看護基礎教育のカリキュラム改正で、老人看護学が設定されてからは、教育の対象である学生がどのような老人観をもっているのか、講義や演習・実習することがその学生の老人観にどのような影響を与えているのかが調査された。その多くは、講義・演習・実習の前後で高齢者に対する見方が変化したかどうかを評価している。どれだけマイナスイメージからプラスイメージになったかを評価の基準としている。しかし、我々がケアする「老人」が多様であることを考えるなら、学生が高齢者をみる見方がどれだけ多様になったかどうかを評価すべきであろう。たとえば、講義・実習前にはプラスのイメージであった学生がマイナスイメージになったとしても、それは、「老人」をより多様に見られるようになったと評価すべきである。さらに、「老人」をより多様に捉えるための教育教材の検討、実習施設の実習素材の具体的検討も今後の課題である。

## V. 結語

一般社会及び看護基礎教育の場での「老人観」に関する研究について検討した。この中で主に「老人とは誰のことか?」「交流・接触経験の内容はなにか?」「看護基礎教育の老人観変容の評価をどう考えるのか?」が問題として浮き彫りにされた。これらは、今後「老人観」に関する研究をすすめる上での重要課題である。

## 引用・参考文献

- 1) 有吉佐和子：恍惚の人，新潮社，1972.
- 2) ボーボワール：老い，人文書院，1972.
- 3) 柴田博、芳賀博、古谷野亘、他：間違いだらけの老人像，川島書店，東京，1985.
- 4) 内閣総理大臣官房広報室：世論調査年間一全国世論調査の現状一，大蔵省印刷局，東京，1995.
- 5) 湯沢雍彦：小学生からみた祖父母との関係，高齢化社会の世代間交流（青木和夫），長寿社会開発センター，東京，42-52，1994.
- 6) 中野いく子、中谷陽明、冷水豊他：小学生の老人観について，世代間交流の理論と実践（青木和夫），長寿社会開発センター，東京，582-599，1996.
- 7) 馬場純子、中野いく子、冷水豊他：中学生の老人観一老人観スケールによる測定一，社会老年学，38，3-11，1993.

- 8) 山本浩二、丹公雄：中学生の意識調査をとおして．保健の科学．37/11．746-753．1995．
- 9) 湯沢雍彦：中学生からみた祖父母との関係．高齢化社会の世代間交流（青木和夫）．長寿社会開発センター．東京．52-60．1994．
- 10) 綿引伴子：女子高校生の高齢者に対する意識や関心の現状をそれに影響を与える要因．日本家政学会誌．45/4．331-341．1994．
- 11) 湯沢雍彦：高校生の老人イメージ．世代間交流の理論と実践（青木和夫）．長寿社会開発センター．東京．624-648．1996．
- 12) 保坂久美子、袖井孝子：大学生の老人イメージ－SD法による－．社会老年学．27．22-33．1988．
- 13) 今村義正：高齢者に対する学生の意識－学生からみた高齢者の健康観・価値観について－．高齢化社会の諸問題（立山龍彦）．東海大学出版会．神奈川．253-261．1991．
- 14) 山本慶祐：高齢者に対する偏見の考察．高齢化社会の諸問題（立山龍彦）．東海大学出版会．神奈川．215-232．1991．
- 15) 今井芳明：大学生の高齢者に対する世代観．高齢化社会の世代間交流（青木和夫）．長寿社会開発センター．東京．430-449．1994．
- 16) 古川正之、秋山登代子：日本人の世代観－国民世論調査「世代観」の結果から－．文研月報．13-23．1976．
- 17) 内閣総理大臣官房広報室：世論調査年間－全国世論調査の現状－．大蔵省印刷局．東京．1994．
- 18) 経済企画庁：国民生活白書－実りある長寿社会に向けて－．大蔵省印刷局．東京．1994．
- 19) 山田ヒロ子、飯田澄美子：看護学生がとらえた老人像．看護展望．9．36-46．1984．
- 20) 藤澤里子、加藤敏子、鳴海喜代子：看護学生の老人観の発達に関する研究－老人看護の講義受講後の変化－．第17回日本看護学会集録（看護教育）．214-216．1986．
- 21) 川島和代、金川克子、真田弘美：老人看護学実習前後における看護学生の老人に対するイメージの変化．第17回日本看護学会集録（看護教育）．94-96．1986．
- 22) 鳴海喜代子、野口美和子、土屋陽子：看護学生の老人観に関する研究 第2報－老人看護の講義受講後の変化－．千葉大学看護学部紀要．8．12-18．1986．
- 23) 鳴海喜代子、佐藤敏子、藤澤里子：看護学生の老人観に関する研究 第3報－臨床実習終了後の変化－．千葉大学看護学部紀要．10．13-21．1988．
- 24) 張替直美、大森武子、渡辺文子ほか：看護学生の老人観に関する研究－学年別イメージ・知識について－．東京女子医科大学看護短期大学研究紀要．69-73．1989．
- 25) 近藤益子、太田にわ、池田敏子：看護学生の老人施設実習前後における老人観及び老人のイメージの変化に関する研究．岡山大学医療短期大学部紀要．3．105-113．1992．
- 26) 吉尾千世子、片桐美智子：看護学生の老人に対するイメージの変化．順天堂医療短期大学紀要．4．43-49．1993．
- 27) 松岡広子、伊藤孝治：老人看護学実習後における看護学生の老人に対するイメージ－非好意的な印象を持った要因について－．愛知県立看護短期大学雑誌．24．7-11．1992．
- 28) 寺島喜代子、高鳥真理子、遠矢福子：老人ホーム実習における学生の老人観の変化－学生の老人との同居経験の有無をとおして－．福井県立看護短期大学研究紀要．18．157-166．1993．
- 29) 守屋滝乃、稲垣宣子、鈴木偉代ほか：「老人」に対する意識調査．看護教育．28．537-541．1987．
- 30) 斎鹿ミヤコ、山本よしゑ、村中陽子ほか：看護学生の入学時までの生活経験と老人観の関係．東海大学短期大学紀要．22．155-164．1988．
- 31) 小泉美佐子、上本純子：看護学生の老人イメージ－Semantic Differential法による分析－．筑波医療短期大学研究報告．11．33-39．1990．
- 32) 太湯好子、酒井恒美、杉田明子ほか：看護科学生が抱く老人のイメージ．川崎医療短期大学紀要．11．7-12．1991．
- 33) 小山真理子、牛山真佐子、田村正枝ほか：看護大学生の老人および老人ケアに対する態度．看護教育．36/9．815-819．1995．
- 34) 近藤益子、太田にわ、池田敏子ほか：看護学生の老人イメージ調査のための尺度項目の構成．岡山大学医療短期大学部紀要．4．83-87．1993．
- 35) 菱沼典子、太田喜久子、小山真理子ほか：看護学生の老人イメージについての一考察．看護教育．36/8．730-735．1995．
- 36) 鳴海喜代子、野口美和子、土屋陽子ほか：看護学生の老人観に関する研究 第一報．千葉大学看護学部紀要．7．1-9．1985．
- 37) 斎鹿ミヤコ、眞船拓子：看護学生の健康イメージ力からみた健康概念理解－老人に関する「保健実習」を通して－．東海大学短期大学紀要．23．7-16．1989．
- 38) 片山信子、出宮一徳：老人看護学教育の検討－看護学生のもつ老人イメージと教育のかかわり－．岡山県立短期大学紀要．33/2．165-173．1990．
- 39) 鳴海喜代子、永江美千代、佐藤敏子ほか：看護学生の老人観に関する研究 第4報－看護学部学生の講義前後、及び実習後の変化－．千葉大学看護学部紀要．12．11-19．1990．
- 40) 橋本祥恵：看護学生の老人観について．新見女子短期大学紀要．12．83-94．1991．
- 41) 今井充子、岩本淳子、田渕郁子ほか：老人のイメージがよくなる特別養護老人ホーム実習．看護展望．17/2．

158-163, 1992.

- 42) 伊藤孝治, 松岡弘子: 老人看護学実習の教育法の研究-実習に伴う老人観の変化-. 愛知県立看護短期大学雑誌, 24, 13-17, 1992.
- 43) 西川千歳, 中野悦子, 丁野みどりほか: 看護学生の老人イメージに関する研究(3)-老人看護学の展開と老人イメージの変化-. 神戸市立看護短期大学紀要, 13, 97-106, 1994.
- 44) 斉藤京子, 藤井博英, 小坂信子ほか: 看護学生の老人に対するイメージ. 看護教育の研究, 10, 222-231, 1994.
- 45) 香西令子, 大須賀桂子, 三好和子ほか: 看護学生における老人のイメージ. 四国公衆衛生雑誌, 39/1, 69-72, 1994.
- 46) 大森武子, 渡辺文子, 張替直美ほか: 看護婦、寮母および看護学生の老人観に関する比較調査研究. 東京女子医科大学看護短期大学研究紀要, 9, 1-7, 1987.
- 47) 岩崎奈津子, 山本美津子, 周藤和美ほか: 高齢化社会における老人観およびそのイメージについて. 日本医科大学看護雑誌, 15-20, 1991.
- 48) 吉田正子, 西川千歳, 中野悦子ほか: 看護学生の老人イメージに関する研究(1)-学生の生活背景と老人イメージ-. 神戸市立看護短期大学紀要, 11, 55-64, 1992.
- 49) 中尾八重子, 土屋尚義, 金井和子: 老人のイメージとその要因について(第一報)-看護者、看護短大生、一般短大生の比較-. 銀杏学園紀要, 16, 113-118, 1992.

(注) 本論文中に、「老人」「高齢者」と言葉が混在しているが、これは、引用・参考文献中の言葉をそのまま使用しているためである。我々は一貫して「高齢者」との言葉を用いた。